

18世紀の古伊万里

—逸品再発見Ⅱ— 展

2017年9月15日(金)～12月20日(水)



展覧会概要

17世紀に誕生・技術革新を果たし、製造技術が頂点に達した伊万里焼。それらの名品の数々は大名など限られた人々が楽しむ高級品でした。続く18世紀は伊万里焼を使用する裾野が広がり、高級品から廉価品まで、使う人に合わせた幅広い製品が生み出された時代と言えるでしょう。たとえば、西欧の王侯貴族たちが室内調度品として愛好したのは、より大型化された壺や皿。対して、元禄の好景気に沸いた日本国内において、富裕な町人層がハレの日に好んで用いたのは金彩が眩い金襷手の食器でした。また、食文化の発展に伴い、使い勝手の良い染付の皿や碗などの組食器が量産されるなど、18世紀には時代の流行や使用者の嗜好に合わせて工夫を凝らした様々な製品が世に送り出されました。その結果、伊万里焼はより多くの人々の暮らしに身近な存在となったのです。今展では高さ70cmを超える大型壺から手のひらに収まる手塩皿まで、初出展を含む約80点を展示。それらの器形や意匠などを比較しながら、人々を惹きつけた18世紀の伊万里焼の多様な魅力を再発見します。



見どころと主な出展品

見どころ ① 海外で人気を博した大型の伊万里焼

海外へ輸出された伊万里焼は、実用のみならず、室内に飾る調度品としての用を求められました。そのため 17 世紀末頃からは、ひと際大きく、見栄えのするものが製作され、西欧の王侯貴族の心を捉えていきます。沈香壺(じんこうつぼ)と呼ばれる鐸付きの蓋を伴う壺や、区画割りした文様構成の皿など、輸出向けの古伊万里金襷手様式の中でも、代表的な大型品を展示いたします。

(右) ①色絵 牡丹文 蓋付壺

伊万里 江戸時代（17世紀末～18世紀前半） 通高 70.5 cm

大型の沈香壺。胴部三方の窓に大輪の牡丹を描く。染付の使用を抑え、金彩を多用して窓外に桜と菊花を散らすことで、華やかさを増している。特に牡丹の葉に用いた二種の緑の鮮やかな発色は見事な仕上がり。

(左) ②色絵 花卉文 輪花皿

伊万里

江戸時代

（17世紀末～18世紀初）

口径 34.2 cm

全体を 10 弁の輪花形とした大皿。見込に花束のようにまとめた牡丹花、区画割りした周間に梅・菊・牡丹・椿を配す。染付の青に上絵の赤・緑・黄と金彩を施した器面は華やかな仕上がり。赤の細線で花弁をあらわすなど丁寧な賦彩である。



見どころ ② 元禄文化を象徴する華やかなうつわ



17世紀末頃から好景気に沸いた国内でも、華やかな古伊万里金襷手様式のうつわは上流階級や富裕な商人たちに人気がありました。眩しいほどの金彩や細密な描き込み、工夫を凝らした構図は、17世紀に培ったノウハウを集約した伊万里焼の一つの到達点と言えるでしょう。

③色絵 五艘船文 鉢

伊万里 江戸時代（18世紀前半） 口径 25.5cm

古伊万里金襷手様式の中でも名品と名高い鉢。内面に 3 艦、外面に 2 艦の船を、内側面には緑・紫の菱花地にオランダ人を配す。繊細な描き込みと金彩の多用により重厚な趣となっている。長崎・出島に入港する船とオランダ人を描いたもので、鎖国政策下、日本人が抱いた異国への憧憬をあらわした意匠であろう。



※古伊万里金襷手様式とは・・・

17世紀末頃に登場する伊万里焼の一様式で、染付と上絵の赤、金を基調とした賦彩、反復文様や窓絵の多用が特色。

見どころ 3 茶懐石やハレの日の宴席で大活躍、様々な組食器

茶懐石や大勢が集まるハレの日の宴席では、組食器の皿や碗が重宝されました。金彩の入ったものから、染付一色のものまで、器形や意匠に工夫を凝らした多様な伊万里焼をご覧ください。



(右) 染付 蕉葉文 皿 伊万里

初出展④色絵 龜甲唐花文 蓋付碗

伊万里 江戸時代（18世紀前半） 通高 7.9 cm

全体を亀甲文で埋めた蓋付碗。亀甲文は上絵の赤・黒で輪郭線をひき、その中を上絵の緑と金彩で塗るといった非常に丁寧な表現。江戸時代の伊万里焼には金彩が剥落したものが多くみられるが、本作は碗・蓋共に良好な保存状態である。見込には環状の松竹梅文、口縁下に四方櫻文がめぐる。10客揃いで伝世。



見どころ 4 伊万里焼の定番文様、唐草



唐草は、その連続して繋がる様子に子孫繁栄や長寿などのイメージが重なり、吉祥の意味合いを持つ文様として、とくに18世紀以降は口縁のみならず、主役としてうつわの全体に盛んに描かれるようになりました。

(上) 染付 蛸唐草文 猪口

⑤染付 龍虎文 輪花皿

伊万里 江戸時代（17世紀末～18世紀前半） 口径 45.6 cm

輪花形の大皿。縁文様は染付の濃淡で塗り分けた唐草、その内側に花唐草がめぐり、見込に主文様となる龍虎図をあらわす。古来より神獣として信仰の対象とされた龍虎だが、本作の両雄は愛らしく穏やかな相貌である。裏面は1本の蔓で繋いだ花唐草がめぐる。



※作品①～⑤の写真データ等をご用意しております。
ご掲載の際は、別紙写真借用申請書をお送り下さい。



会期中のイベント



展示解説

展示期間中、当館学芸員による展示解説を行います（各回所要時間60分程度）。

- 第2・第4水曜 14時～（9月27日、10月11・25日、11月8・22日、12月13日）
- 第2・第4土曜 11時～（9月23日、10月14・28日、11月11・25日、12月9日）
- 10月14日（土）、当館創設者 戸栗亨メモリアルデーは、11時と14時の2回、展示解説を行います。
- 予約不要（入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください）



フリートークデー

毎月第4曜日は、館内でのお話しをご自由にお楽しみいただけるフリートークデーとして開館いたします。

- 10時～17時（入館受付は16時30分まで）（9月25日、10月23日、11月27日）
- 14時～ミニパネルレクチャーを開催（予約不要、入館券をお求めの上ご自由にご参加ください）



戸栗美術館 概要

戸栗美術館は、創設者 戸栗亨が長年に渡り蒐集した陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987年11月に、旧鍋島家屋敷跡にあたる渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里、鍋島などの肥前磁器および、中国・朝鮮などの東洋陶磁が主体であり、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



所在地：東京都渋谷区松濤 1-11-3

開館時間：10:00～17:00 (入館受付は 16:30まで)

※毎週金曜日 10:00～20:00

(入館受付は 19:30まで)

休館日：月曜日

※9月18日・10月9日（月・祝）は開館、

9月19日・10月10日（火）は休館。

※毎月第4月曜日はフリートークデーとして開館いたします。

入館料：一般 1,000円/高大生 700円/小中生 400円

(団体20名様以上で200円割引)

※9月18日（月・祝／敬老の日）は、65歳以上の方は入館無料となります。

受付にて年齢のわかるものをご提示ください。

※10月14日（土）は、当館創設者 戸栗亨のメモリアルデーのため、無料観覧日となります。

交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩15分、京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分

※当館には駐車場・駐輪場はございません。



■アートサークル・学生アートサークル会員制度

一般の方向けと学生の方向けの会員制度をご用意しております。1年間何度でもご入館いただけるほか、特別イベントなどの特典がございます。

(年会費：アートサークル 5,000円／学生アートサークル 2,500円)



■次回展示予定

2018年1月7日（日）
～3月21日（水・祝）

古伊万里にみる
うわぐすり展

展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人戸栗美術館
広報担当宛

〒150-0046 東京都渋谷区松濤 1-11-3
TEL : 03-3465-0070 FAX : 03-3467-9813
URL : <http://www.toguri-museum.or.jp/>
E-mail : kouhou@toguri-museum.or.jp



TOGURI MUSEUM OF ART
戸栗美術館